

桃山祭の変遷

——問題史的考察——

経済学部 4年 磯 貝 健 大

<目次>

はじめに

I. 桃山祭とは

II. 年代別にみた桃山祭

1. 1959年・1960年代の桃山祭
2. 1970年代の桃山祭
3. 1980年代の桃山祭
4. 1990年代の桃山祭
5. 2000年代の桃山祭
6. まとめ

III. オールナイトフェスティバル

1. 起源
2. 桃山祭実行委員会の運営
3. 出演者
4. 当時を知る大学職員へのインタビュー
5. オールナイトフェスティバルの終了

IV. 桃山祭の飲酒問題

1. アルコール販売禁止に至る経緯
2. アルコール全面禁止

おわりに

参考文献

はじめに

桃山祭とは桃山学院大学で行われる大学祭の名称である。歴史は長く、第1回目は1959年に開催され、2011年で第51回目の開催を迎えた。第1回桃山祭において運営・企画を行っていたのは、桃山学院大学祭実行委員会（当時の桃山学院大学の大学祭実行委員会の名称）であった。この組織は、桃山学院大学学生会を母体としていた。つまり、桃山祭は学生の自治活動の一環として始められた行事であった。しかし、現在、桃山祭を運営している桃山祭実行委員会（第12回から名称変更）に母体組織はなく、客観的に見ると基盤が弱い不安定な組織であるといえる。

先行研究である、玉置栄二氏の「紆余曲折の「桃山祭」一五〇回を振り返

って一」では、桃山学院大学の学生が50回にわたる大学祭のバトンをどのように繋いできたか論じている¹⁾。また、大学祭の運営のあり方に焦点を当て、10年または20年区切りで桃山祭を語っており、結論として次の文章が記されている。

このように本学の大学祭は、二〇〇〇年頃までの状況について、少なくとも主催者側から見たとき、常に何らかの問題を孕み、その開催にあたっては不安が付きまといっていたように見えます。歴史的に見れば、そもそも「自主的な大学祭とは不安定なもの」であるように感じました。翻っていうと、不安定だからこそ、価値があるのかもしれませんが。(略) 現在も本学の大学祭は、「桃山祭実行委員会」の運営により自主的に行われています。もしも先に述べたように、「自主的な大学祭とは不安定なもの」であるという命題が真ならば、現在の安定しているように見える状況とは何なのかを、一度立ち止まって考えてみて良いのではないのでしょうか。

つまり、現在の桃山祭にとっての価値はどこにあるのか。そして、桃山祭はこれから、どうあるべきなのかを本稿を通して考えてみたい。

I. 桃山祭とは

桃山祭は、桃山学院大学が昭和町に開学した1959年から2011年に至るまでの53年間にわたって、桃山祭実行委員会（以下、実行委員会）に所属している学生が主体となって企画・運営している大学祭である。2011年も第51回桃山祭が開催された。大学側は実行委員会に対して、企画・運営に必要な物品の貸与、また運営費の援助金という形で協力している。

表1は、1959年から1972年までの

表1 桃山祭の名称

| 年 | 名称 |
|------|--|
| 1959 | 創立桃山学院大学祭 |
| 1960 | 第2回大学祭 |
| 1961 | 第3回大学祭 |
| 1962 | 第4回大学祭(アンデレ祭) |
| 1963 | 第5回大学祭(アンデレ祭) |
| 1964 | 第6回桃山学院大学大学祭 (1964 6th St. Andrew's Festival) |
| 1965 | 第7回桃山学院大学祭 |
| 1966 | 第8回桃山学院大学大学祭 |
| 1967 | 第9回大学祭 (9th St. Andrew's Festival) |
| 1968 | 第10回桃山学院大学大学祭 (10th St. Andrew's Festival) |
| 1969 | 未開催 |
| 1970 | 未開催 |
| 1971 | 修羅祭(第11回) |
| 1972 | 第12回桃山祭 |

桃山学院大学の大学祭の名称である。桃山学院大学が創立された1959年には「創立桃山学院大学祭」という名称で開催された。その後、1968年の第10回大学祭まで、大学祭の名称は様々ではあるが、毎年開催されていた。しかし、1969年からの2年間は学園紛争のために開催されなかった。そして、学園紛争終息後の1971年に「修羅祭」という名称の第11回大学祭が開催された。その翌年には、「第12回桃山祭」として開催され、2011年の「第51回桃山祭」に至るまで毎年開催されている。

つまり、1959年から1971年の11回の大学祭は「桃山祭」という名称ではなかった。そして、1972年の第12回大学祭から名称が「桃山祭」になり、現在に至るまで桃山祭という名称が受け継がれている。

この間、桃山学院大学は創立から現在までに2回の大学全面移転を行っている。1959年の創立時には大阪市阿倍野区昭和町に建てられ、学園紛争終息後の1971年には、学生が増加し教室が手狭になったなどの理由により登美丘（現堺市東区西野）に全面移転している。そして、1995年にさらなる学生数の増加に対応して現在の和泉市まなび野へ全面移転した。桃山祭（以下、桃山学院大学の大学祭の名称を桃山祭で統一）の開催場所も、大学の移転とともに変わったのである。

Ⅱ. 年代別にみた桃山祭

先行研究である、玉置栄二氏の「紆余曲折の「桃山祭」一五〇回を振り返って一」では、桃山祭の「運営」に焦点を当てていた。しかし、各時期の桃山祭で行われていた「企画」や「主張」に深くは触れていない。そこで、本論文では玉置氏が論じた「運営」を背景にして、「企画」や「主張」に焦点を当てることで、各年代の特徴を10年区切りで見たい。以下では各年の桃山祭パンフレットを用いて各時期の特徴を明らかにしていこう。

1. 1959年・1960年代の桃山祭（第1回～第10回）

第1回の桃山祭は演劇や合唱などを行う文化祭と100m走やリレーを行う体育祭で構成されていた。その流れで第8回まで文化祭と体育祭は、桃山祭の企画の一つとして存在していた。そのうち、第4回では写真部や映画研究会による展示や講演・シンポジウムがこの年の桃山祭企画の大半を占めていた。また、第5回からは「展示祭」という企画が現れ、これも桃山祭企画の大半を占めるようになった。「展示祭」は各団体の成果を発表する場として第8回まで続いた。

第9回と第10回では展示も行われたが、講演やシンポジウムがパンフレットの目次の多くを占めた。これは桃山学院大学における学生運動の高揚が関係しているのだろう。第9回の講演・シンポジウムの内容は、「資本の自由化と日本経済」「大学の危機・その本質」「70年安保に向けて」、また、第10回の講演・シンポジウム内容は「大学自治論」「現代の大学をめぐる」「60年安保闘争と総括と70年安保の展望」などであった。つまり、60年代後半の桃山祭は学生運動という要素を強く反映した企画が主流であったといえよう。

2. 1970年代の桃山祭（第11回～第19回）

第11回～第16回までは展示やシンポジウムなどの文化系企画が主流であったと考えられる。しかし、そのシンポジウムのテーマは「日本のモータースポーツの歩み」や「1905年革命におけるトロツキーとレーニン」などであり、趣味的・文化的なものや学生運動的なものが混在していた。この年代のパンフレットにおける実行委員会の言葉には、学生自治や社会へのメッセージと学生運動が一体化したような状況が読み取れる。たとえば、第12回パンフレットの「実行委員会よりメッセージ」には次のような文章がある²⁾。

我々が、今、まざまざと見せつけられる大学は、巨大な管理社会に包括され、埋没させられ、分断化を進められている。一方大学は産業社会に対する労働力商品として排出していく構造のみではなく、大学を都市から地域形成といったとこ

ろで位置づけ産業管理社会を形成している。我々はこういった策動に断固反対する。

とはいえ、上に述べたように企画には趣味的なものもあり、パンフレットにおける発言と桃山祭の企画にはズレがあった。

以上のような、ズレは、「学生運動」の一環であるという意識がある一方で、それとは違った文化的な企画にしたいという流れもあった。実行委員会に母体組織がなかったこともその原因であろう。つまり、桃山祭を通して何をしたいのかなどの目的がやや定まっていなかったといえるのではないだろうか。

第17回～第19回の企画や実行委員会の主張は、学生間のみにおける「享楽」を目的としていたことがパンフレットから読み取れる。企画内容において、「性」について知ることを目的とした映画が多く、また第12回から始められたオールナイトフェスティバルにも焦点が当てられている。オールナイトフェスティバルとは、夕刻から翌朝にかけて行われる徹夜の音楽ライブであるが、詳細については後に述べる。実行委員会は第17回から、学生運動の流れを引き継ぐ学生会館自主管理委員会が母体組織として機能することで基盤がはっきりしたと玉置氏は指摘している。しかし、学生会館自主管理委員会という母体組織の性格にも関わらず、内容という点では学生運動とは無関係な企画が多くを占めている。つまり、学生会館自主管理委員会という母体組織は基盤を固め桃山祭の安定化をもたらしたが、それは実際にはそれまでの桃山祭に色濃かった学生運動色自体は次第に弱まったと言えるのではないだろうか。

3. 1980年代の桃山祭（第20回～第29回）

80年代の企画内容は学生間の交流や楽しみが中心になっているようにパンフレットから読み取れる。たとえば、ダーツゲーム、麻雀大会、ききビール・ききタバコなどである。つまり、小規模で学生が楽しめる企画が80年代パンフレットの多くを占めている。

80年代パンフレットの実行委員会のメッセージでは「現状の打破」を主張

していることが多い。たとえば、第27回桃山祭パンフレットの「-実行委からのアピール-」には次のような文章がある³⁾。

桃山祭は、今年で27回目を迎える。今年も開催できることに喜びを感じる反面、年々、規模が縮小し、このままでは、何の意味も持たない単なる祭り（バカ騒ぎをする場）に成り下がってしまうのではないかという不安が、つきまとっている。（略）

我々の桃山祭は、オールナイトをはじめとして、学園祭の異端児であり、システムに管理できない自由な祭りでなくてはならないのである。それを造るも壊すのも、桃山の学生的手中に在るのである。さあ、今こそ、既製の殻を叩き割る時である。

つまり、「現状の打破」を主張するのは、規模の縮小への危惧や単なる「バカ騒ぎ」の脱却という思いからであろう。しかし、企画内容を見てみると、学生の楽しみを目的とするものが多く、「現状打破」という主張に沿うような企画はみられない。これは、70年代の傾向がさらに強まったことを意味している。

4. 1990年代の桃山祭（第30回～第39回）

第30回～第34回の企画内容や主張は、80年代とあまり変わることがなく、またパンフレットにおける発言と実際の行動が矛盾していることも同様である。

第35回からは、大学の全面移転により、現在の和泉キャンパスで新たに桃山祭が開催された。和泉キャンパスにおける桃山祭では、特徴的な新たな企画が生まれる一方、それまでの桃山祭の傾向を象徴していた企画がなくなった。新たに生まれた企画は2つある。1つ目は、親子で楽しめるスタンプラリーのような子供向け企画である。2つ目は桃山学院大学の特色を生かしたチャペルでのパイプオルガンコンサートである。1995年のパンフレットには「誰もが大学祭というものに気軽に参加できる環境を作りたい」と記されており、これらの新企画は大学が住宅地に移転したことによる新たな来学者の獲得や桃山学院大学の認知度上昇を目指したものであったと考えられる。また、終

了した企画とは、合同コンパや酒類の一気飲み企画といった、80年代の桃山祭で好まれたような企画である。

第35回以降、パンフレットの企画と主張からは大学と地域の関わりを重視しているように読みとれる。しかし、これは大学祭らしい大学祭から、地域のイベントとしての性格が強まる傾向をもたらしたと言えよう。しかし、これまでの流れをふまえると地域密着型の桃山祭で、80年代～90年代前半に叫ばれた「現状の打破」はできるのだろうか。それを考えての決意表明なのか、第35回桃山祭パンフレットの実行委員長「ごあいさつ」には「桃山祭で桃山学院大学の“色”を出すことが重要」というような意味を含む文章が掲載されている⁴⁾。逆にいえば、これは大学の全面移転を機に、「現状の打破」を現実には起こせない、あるいは「現状打破」をそもそも望まないという考えの流れができてしまったことを示すように思われる。

5. 2000年代の桃山祭（第40回～第51回）

この年代でも、地域密着型と時代の背景を色濃く反映した企画が生まれた。その1つ目は、第43回（2003年）から始められた献血である。これは、若年層の献血離れへの対策だろう。2つ目は、第41回（2001年）から始められたエコロジーを考える企画である。この企画は、桃山学院大学として地球環境問題に取り組む姿勢を明確にするために、2000年に環境問題に取り組む指針となる「環境宣言」と「環境目標」を大学が掲げたのをきっかけとして始まった。その企画内容は、模擬店におけるエコロジー食器の使用やペットボトルの回収、またエコに関するクイズやエコバック制作体験などである。しかし、これらの企画には70年代～90年代前半に見られた、「現状の打破」の志向とはほとんど関係のないようなものと言えよう。

パンフレットに記載されている実行委員会委員長の言葉には、現状の桃山祭に満足しつつ、「現状の打破」というよりは、「桃山祭の存続」を願っている言葉が多い。つまり、「桃山祭の存続」のためには地域密着型と時代背景を反映した企画が欠かせないということだろう。しかし、「桃山祭の存続」を願

うということは、「桃山祭の存続」に危惧があるということである。「桃山祭の危惧」は80年代からパンフレットの文章に時々記載された。つまり、この問題は80年代から問われていたということである。しかし、危惧され始めた当初から、現在までそれを打破するような改革をうたったことが読み取れるパンフレットはない。そして、近年は「今まで以上の桃山祭となりました」といった調子の実行委員会の言葉が多い。しかし、何が「今まで以上」なのか、その具体的な内容は明らかではない。つまり、実行委員会の主張は現状を追認するだけという傾向が90年代後半から根付いてしまったのではないかと考える。

6. まとめ

以上のように、「企画」と「主張」を軸に各年代の桃山祭を見ると、1959・1960年代の桃山祭が、一番安定していた時期に思える。その理由は、実行委員会の主張と企画が「学生運動」の一環ということで一致していたからである。しかし、一方で第3回を終えて、桃山学院大学新聞部から発行された「桃山学院大学新聞」には、すでに学生の桃山祭に対する無関心が取り上げられており⁵⁾、桃山祭の危機が叫ばれている。

また、70年代から現代までは実行委員会の「主張」と「企画」は必ずしも一致していない。それは、70年代～80年代に記載しているように、「学生運動」の一環である意識が薄れたことがその理由であろう。しかし、「桃山祭の危機」が叫ばれる中、桃山祭には、70年代から現代までの「主張」と「企画」が一致していることが1つある。それは、学生や来学者の楽しみを追及しようとしていることである。

このように、「主張と企画の矛盾」・「楽しみの追及」という70年代からのあり方が現代の桃山祭を支えてきた。60年代から一貫して叫ばれてきた「桃山祭の危機」という問題に対応するためには、実行委員会が現状の追認ではない形で強い意思表示をして「主張と企画の一致」をあらためて目指すことが不可欠であろう。その際は、もちろん学生や来学者の楽しみを追及する姿

勢も引き継ぐことが大切である。参加して楽しい学生たち自身による桃山祭という形を維持しながら、なおかつ「現状の打破」する意思も必要なのではないだろうか。

Ⅲ. オールナイトフェスティバル

本章では、前章で見た時代別の桃山祭のうち、特徴的なイベントであったオールナイトフェスティバルについて見よう。

これは、第12回（1972年）から第28回（1988年）までの計17回行われた桃山祭のイベントである。このイベントはオールナイトという名前の通り、夕刻から翌朝にかけて行う、徹夜の音楽コンサートであった。数十組ものアマチュアやプロバンドによる演奏時間は平均13時間にも及んだ。また、行われていた場所は桃山学院大学の登美丘キャンパスにあった2-101であり、収容人数は立ち席を含み約1000人であったが、イベント当日は約2倍を超える観客の来場で溢れかえることもあったという。また少なくとも第17回からは本イベントへの入場料金がパンフレットに提示されている。ここでは、桃山祭で行われていた本イベントの性格について当時のパンフレットやインタビューから考察する。

1. 起源

第12回桃山祭に、「オールナイト・ジャズ&ロックフェスティバル」というタイトルで、夕刻から翌朝にかけて行うアマチュアやプロバンドによる音楽コンサートがはじめて開催された。「オールナイトフェスティバル」というタイトルになるのは第18回からである。

第12回桃山祭に行われた「オールナイト・ジャズ&ロックフェスティバル」の起源は前年の1971年に修羅祭（第11回）で行われた「ロックフェスティバル」だと思われる。この「ロックフェスティバル」は、関西のアマチュアやプロバンドが出演しており、おそらく夕刻から深夜2時まで開催された。

このイベントの開始時間などの詳細な内容はパンフレットに記載されておらず不明であるが、唯一わかっているのは、憂歌団というブルースバンドが出演したことである。そして、この「ロックフェスティバル」にプロバンドが出演していることは翌年の「オールナイト・ジャズ&ロックフェスティバル」と同様であり、第12回では他にプロバンドが出演するイベントがなかったことから考えると、第11回の修羅祭で行われた「ロックフェスティバル」がオールナイトの実質的な起源だと考えられる。

2. 桃山祭実行委員会の運営

第12回から、「オールナイト・ジャズ&ロックフェスティバル」がはじまったが、第17回までの計6回は本イベントに対する桃山祭実行委員会の関わり方が定まっていなかった。第12回は主催が桃山祭実行委員会であり、企画は桃山学院大学軽音楽部であった。つまり、軽音楽部が夕刻から翌朝にかけて行う、プロバンドによる音楽コンサートを企画したのである。また、第13回には主催が文化サークル連合中央常任委員会、企画が桃山学院大学軽音楽部、協賛が桃山祭実行委員会となった。第14回から第16回はパンフレットがなくイベント内容や主催者は不明だが、第17回も主催が文化サークル連合中央常任委員会、協力が桃山学院大学軽音楽部や他3団体、協賛が桃山祭実行委員会となっている。以上から、第12回から第17回までの桃山祭実行委員会の本イベントに対する関わり方には一貫性がなく、どちらかといえば後援するだけの立場だったと考えられる。

そう考えると、第18回から第28回まで、主催が桃山祭実行委員会で統一され、第18回からの変更点が多いことも頷ける。その変更点とは、イベントタイトルが「オールナイトフェスティバル」で統一されたこと、本イベントへの入場料金の倍増、本イベントと同時に夜から翌朝にかけて行うディスコイベントの開催である。このような同じ時間帯にディスコを開催するとコンサートの観客の取り合いになると考えられるので、主催団体が別だと開催が難しいと考えられる。以上のように、本イベントに深く関わって

いなかったために実現が難しかったことが第18回から桃山祭実行委員会が主催になったことで、可能になったと言える。

3. 出演者

このイベントには、今で言う豪華なアーティストが出演していた。それは、ブレイクする前の「RCサクセション」「BOØWY」「東京スカパラダイスオーケストラ」「憂歌団」「泉谷しげる」などである。他にもパンクバンドや「チャー」「シーナ&ロケッツ」といったマニャック系バンドも多く出演していた。

4. 当時を知る大学職員へのインタビュー

現在、桃山学院大学の職員を務めておられる方（以下、A氏）に、最後のオールナイトフェスティバルが開催された1988年とその前後のオールナイトフェスティバルについて話を伺った⁹⁾。当時、A氏は大学職員として桃山祭に関わっていた。つまり、大学側から見た1988年前後のオールナイトフェスティバルについて、ここで述べる。

お話を伺う限り、A氏は、オールナイトフェスティバルについて、良い印象を持っていなかった。その理由は、筆者が当時のパンフレットを見ただけでは想像もできないことであった。パンフレットを見る限りこのイベントは「学生や一般人が楽しめるもの」「桃山祭で一番盛り上がるイベント」「若手バンドの登竜門」などとある。しかし、その実態は大学側から見ると違っていた。

A氏は、オールナイトフェスティバルを「恐い」イベントであったと語る。それは、当時の客のほとんどが一般人であり、そこに暴走族まがいの客が多く含まれていたからである。しかも、当時はこのオールナイトフェスティバルが毎年のように全国で出版されている雑誌で取り上げられていたので、全国各地からこの類の客が大学へ集まり、会場の収容人数を超え、2000人以上の客で溢れかえった。それが原因でイベント当日には大学周辺における

無断駐車が多く、さらに喧嘩も多発し、実際にAさんも暴行を加えられたという。そのために、大学側はオールナイトフェスティバルの警備を体育会系の学生に依頼し、対処していた。このような客が多く来る理由は、徹夜のコンサートで酒が飲めたこと、他大学に比べて、桃山祭は開催時期が遅く、客にとっては大学祭で騒げる最後で最大の間であったことであるという。

また、オールナイトフェスティバルのライブ状況も、上記のような客が多く来る原因であったように思える。それは出演バンドのボーカルが、複数のカミソリが繋がれたアクセサリーを身につけ、演奏中にそのカミソリを外して、客に投げるようなことさえあったというのである。また他のバンドでは、自分の尿を客に浴びせるなどの奇行さえも見せていたという。そして、このような行動が客に受け入れられてもいたというのである。

運営方法も少し風変わりなものだった。つまり、オールナイトフェスティバルを統括・プロデュースしていたのは実行委員会ではなく、元桃山学院大学生のある人物であった。この人物のプロフィールや、いつ頃からオールナイトフェスティバルに関わっていたのかは不明だが、このイベントが終了する1988年頃まで関わっていたことは間違いないそうである。彼は、オールナイトフェスティバルの統括・プロデュースを行い、当日、実行委員会のメンバーをも動かしていた。また、プロデューサーという立場であったので、若手バンドの登竜門として、マニアックなバンドをわずかな出演料で出演させていた。逆に、有名なバンドを100～150万円ほどの出演料で出演させていたこともあったという。当時、大学側から出される桃山祭予算は約400万円であり、ほぼ全てをオールナイトに使っていたことが想像できるという。まさに、彼がオールナイトフェスティバルを支配していたのである。そのことをA氏はよく思っていないことが、A氏の話しぶりから窺えた。

5. オールナイトフェスティバルの終了

A氏の話もふまえ、ここで当イベントが終了した理由について述べる。その理由は「大学全面移転」「暴走族まがいの客が多い」「実行委員会が自主的

大学祭を目指す」などであったと思われる。「大学全面移転」という理由は、A氏の話の中で出てきた。なぜ「大学全面移転」のためにオールナイトフェスティバルを終了させたか、詳しい理由はわからないが、「暴走族の類の客が多い大学祭を開催している」ということが移転問題と何らかの形で関係したものと考えられる。また「実行委員会が自主的の大学祭を目指す」という主張は、第29回桃山祭パンフレット⁷⁾から読み取れる。つまり、実行委員会が特定の人物による大学祭予算の不当な収受や「支配」を問題にしたということであろう。

以上のような理由でオールナイトフェスティバルは第28回桃山祭を最後として幕を閉じたのである。このイベントは、前章で述べたように桃山祭が学生運動色を弱め、学生の交流や楽しみをもっぱら追及していく時期に行われたものだった。これは他大学にはない特徴的なイベントではあったものの、かなりの逸脱と不正常な側面も伴っていたのであり、結局はそれを問題と考えた大学と実行委員会の合意による判断によって収束せざるをえなかったと言えよう。

IV. 桃山祭の飲酒問題

本章では、1990～2000年代の桃山祭運営について大きな課題のひとつになった飲酒問題について論じる。

表2は第36回(1996年)から第51回(2011年)における桃山祭の飲酒問題に関する経緯を整理したものである。そして、この問題について、第51回桃山祭実行委員会と桃山学院大学の企画課に在籍している嶋田剛氏(1998年から本学に在籍)に聞き取り調査を行った⁸⁾。以下では、表2も参照しつつ、嶋田氏のお話や先行研究を盛り込みながら論じていく。

表2 桃山祭における飲酒問題に関する経緯

| 年代 | 経緯 |
|------------|-------------------------------------|
| 第36回(1996) | 桃山祭において外部来場者と本学学生との不祥事(喧嘩)発生 |
| 第37回(1997) | パンフレットに『飲酒危険警告発令』と題した飲酒の危険性を掲示 |
| 第38回(1998) | 桃山祭の最終日、模擬店から出火した炎により仮設店舗約六平方メートル全焼 |
| 第39回(1999) | 桃山祭におけるアルコール販売の禁止 |
| 第40回(2000) | 桃山祭におけるアルコール全面禁止 |
| 第41回(2001) | 桃山祭最終日の後夜祭のみ、試験的に場所と時間を限定して飲酒容認 |
| 第42回(2002) | 桃山祭最終日の後夜祭のみ、試験的に場所と時間を限定して飲酒容認 |
| 第43回(2003) | 桃山祭最終日の後夜祭のみ、試験的に場所と時間を限定して飲酒容認 |
| 第44回(2004) | 桃山祭最終日の後夜祭のみ、試験的に場所と時間を限定して飲酒容認 |
| 第45回(2005) | 実行委員会の意向により、桃山祭におけるアルコール全面禁止 |
| 第46回(2006) | 桃山祭におけるアルコール全面禁止 |
| 第47回(2007) | 桃山祭におけるアルコール全面禁止 |
| 第48回(2008) | 桃山祭におけるアルコール全面禁止 |
| 第49回(2009) | 桃山祭におけるアルコール全面禁止 |
| 第50回(2010) | 桃山祭におけるアルコール全面禁止 |
| 第51回(2011) | 桃山祭におけるアルコール全面禁止 |

1. アルコール販売禁止に至る経緯

1990年代後半、桃山祭における飲酒が原因で次のような事件が起きた。1996年の桃山祭期間中に外部来場者と本学学生との喧嘩が発生した。また、1998年の桃山祭の最終日、模擬店から出火した炎により1店舗約六平方メートル全焼し、その後の模擬店や後夜祭は中止となった。そして、その翌年99年には桃山祭におけるアルコールの販売が禁止された。

この販売禁止に至る経緯は、第39回(1999年)の桃山祭直前に発行された『アンデレクロス』⁹⁾に、教員組織である学生生活委員会が出した「大学祭でのアルコール販売は禁止する」と題する、次のような文章に記されている。

模擬店で販売される各種のアルコール類が毎年のように多くの問題を惹起していた。昨年の場合、約二十名の泥酔者が出たり、四件の建築物損壊が発生したり、数件の喧嘩・もめごとや火災が起きたりした。(中略)

学生生活委員会はこうしたアルコールに起因する異常事態(喧嘩・もめごと・泥酔者・器物破損など)の発生をゆるさない。そのためにアルコール販売を禁止するという結論に達した。

それを踏まえて、第39回桃山祭実行委員会とも二回協議をもち、アルコール問題に限って長時間話し合った。しかし、実行委員会はアルコールに起因する諸問

題の発生防止に関して若干の改善策を示しただけで、抜本的な改革案は提示できず、事故・事件が起きた後の対策及び自己責任についても明確な回答を示しえなかった。また、「未成年者飲酒禁止法」を無視し、大学生の中に多数いる未成年者への酒類の販売及び未成年の飲酒という違法行為に対しての対策についても明確な方針を示すことができなかった。

大学は、高等教育と研究の場であるが、同時に法と秩序を遵守して、構成員の安全を守る場でもあり、大学祭といえども、アルコールに起因する異常事態や「未成年者飲酒禁止法」に反する行為を決して放置することはできない。そのために、販売も飲酒も全面的に禁止するのが最善であるが、今年はとりあえず「販売を禁止する」という処置だけを取ることにして最終的には実行委員会の了承を得た。他大学の場合、販売も飲酒も「全面禁止」とする大学が増えている。本学でも、一時の愉しみのために飲酒にこだわることをやめ、逆にアルコールを販売しないこと、飲まないことに誇りを持ち、アルコール抜きでも立派に大学祭を成功させることができることを示そうではないか。大学祭に参加する全学生諸君が今回の「アルコール販売禁止」の決定に全面的に協力することを心から願っている。

以上のように、アルコール販売の禁止は学生生活委員会と桃山祭実行委員会の協議の末に決定したことがわかる。また、同じ『アンデレクロス』において、第39回桃山祭実行委員長はアルコール販売の禁止の決定について、次のように語っている。

前期に投票というかたちで学生の皆さんにも考えていただきました。投票の結果をもとに実行委員会は今後もアルコールの販売を容認していく方針でしたが、大学側の指導もあり、アルコール販売は禁止することになりました。今までの状況を見ても最悪の事態が起こる前の賢明な判断としますので、どうぞご理解ください。

この内容からは、学生を対象とした投票を実施し、アルコール販売は禁止にしないという結果が出たことがわかる。しかし、大学側の指導を受け、結局はアルコール販売禁止に至ったのである。

学生生活委員会と第39回桃山祭実行委員長の2つの文章から、実行委員会では飲酒販売に賛成の立場であったが、学生生活委員会との協議の上での妥協案として販売だけ禁止する措置がとられたことが読み取れる。これは、アルコールの販売禁止が桃山祭や学生にどの程度の影響を与えるのか、様子を見

るための措置であったとも考えられる。

また、嶋田氏のお話から、わかったことがある。それは、桃山祭の歴史において、1996年の喧嘩は飲酒が原因で起こった初の事件ではないということである。なぜなら、1995年に実行委員会は警備案を作成し始めたが、この警備案は飲酒問題の対策として、桃山祭における警備の配置などを示したものであったからである。つまり、1990年代末に外部来場者と本学学生との喧嘩や火災が起きる以前から飲酒に関しての問題が発生していたという経緯があり、学生生活委員会や実行委員会はそれの対応に追われていたことがわかる。

2. アルコール全面禁止

表3 桃山祭における飲酒ルール

| 年次 | 第41回(2001) | 第42回(2002) | 第43回(2003) | 第44回(2004) |
|------|---|--------------------------------|--|--------------------------------|
| 指定日 | 最終日 | 最終日 | 最終日 | 最終日 |
| 指定時間 | 17:45~18:45 | 16:30~18:30 | 16:30~18:30 | 16:30~18:30 |
| 指定場所 | ・ベテロ館横芝生スペース ・第2守衛室裏駐車場 | ・バルナバ館2階 ・マーガレット館1、2階 | ・ベテロ館横芝生スペース | ・ベテロ館横芝生スペース ・第2守衛室裏駐車場 |
| 許可本数 | 1人あたり2本(350mlのみ) | 1人あたり2本(350mlのみ) | 1人あたり2本(350mlのみ) | 1人あたり2本(350mlのみ) |
| 許可酒類 | ビール、酎ハイ、カクテル アルコール度数6%以下に限る | ビール、酎ハイ、カクテル アルコール度数6%以下に限る | ビール、酎ハイ、カクテル アルコール度数6%以下に限る | ビール、酎ハイ、カクテル アルコール度数6%以下に限る |
| 結果 | 申込900人中、若干名参加 ※申込、参加団体数は不明 ※泥酔者1名 | 申込12団体中、1団体参加 | 申込16団体中、0団体参加 ※ノンアルコールビールは アルコール飲料扱い | 申込6団体中、0団体参加 |

表4 桃山祭における飲酒アンケート調査

| 年次 | 第41回(2001) | 第42回(2002) | 第43回(2003) | 第44回(2004) |
|------|------------|------------|----------------|--------------------|
| 対象人数 | 3650人 | 3000人弱 | 1742人 | 1750人 |
| 結果 | 不明 | 不明 | 賛成55% 反対45% | 賛成67.8% 反対32.2% |

2000年には学生生活委員会が桃山祭におけるアルコール全面禁止を決定し、それを実行委員会に諮り、合意を得た。学生生活委員会が決定したアルコール全面禁止の理由は、次の4つであった。〔1〕全国的にアルコール禁止の大学が増加したこと、〔2〕桃山祭参加の大半が未成年であること、〔3〕昨年アルコール販売を禁止したが、泥酔者は減少しなかったこと、〔4〕急性アルコール中毒による事故を未然に防ぐ必要があること、であった。

この決定で第41回(2000年)からアルコールの全面禁止が始まった。前年(1999年)のアルコール販売禁止の結果をうけてのものだったといえる。〔1〕

について言えば、近畿大学や関西学院大学、龍谷大学などでも1999年から大学祭における飲酒を禁止しており、桃山学院大学は少し遅い対応であったといえる。しかし、桃山祭では2001年からの4年間、場所と時間を限定しての事前申込制で飲酒が再び容認されている。表3は2001年から2004年の飲酒ルール一覧である。

限定的に飲酒が容認された理由は、主に桃山祭実行委員会の活動にある。桃山祭実行委員会は桃山祭で飲酒を容認してもらうべく、教員への訪問インタビュー、学長へのヒアリング調査などを実施した。また、2001年の桃山祭が始まる前に飲酒の是非をめぐるアンケートも行われた。アンケートの内容や対象者などは不明であるが、その結果を表4にまとめた。アンケートは2001年から2004年に毎年行われており、第43回と44回の飲酒に関してのアンケートの回答ではわずかではあるが、賛成票が多い。しかし、第43回からアンケート対象人数が大幅に減少している。これは、桃山祭で飲酒が容認されていた時期の様子を知っている実行委員会の構成員が引退（卒業）していき、その時期を知らない構成員は飲酒容認へ向けた運動への熱意が低下していったからではないだろうか。

大学側はこのような実行委員会の活動を受けて、「学生の自主性回復」という理由で第41回(2001年)から飲酒を一部容認した。飲酒の一部解禁に伴い、第41回ではアルコールの危険性を知ってもらうことを目的とした講演会も行われた。一方で、表3の「結果」の欄に示されているように、「ルールに従った飲酒」は学生には受け入れられなかった。このような結果をうけて大学や実行委員会は、第45回(2005年)の桃山祭から再び飲酒を全面禁止とした。この年からの飲酒全面禁止は、実行委員会から大学側への要望という形で実現したものであり、この年の桃山祭には大きな混乱も生じなかった。

またその後も現在に至るまで毎年のように、大学と実行委員会は桃山祭における飲酒問題を話し合っているようだが、飲酒の容認は実行委員会が拒んでいる。その理由として挙げられるのは、飲酒を容認するには責任が重いこと、また、その対策を十分に準備できないことなどであった。

なお、実行委員会への聞き取り調査によると¹⁰⁾、桃山祭において2006～2010年まで飲酒が全面禁止になったが、隠れて飲酒をしている団体が存在していることも事実としてある。

おわりに

桃山祭は、すでに第3回（1961年）から存続の危機が叫ばれていた。桃山祭が経過してきた各時期には様々な問題も生じた。1970～80年代にはオールナイトフェスティバルが開催され、桃山祭独自の企画として多くの観客を集めた。しかし、この企画には問題も多く88年には最後を迎えた。1990年代後半～2000年代前半には飲酒問題が焦点となった。

こうした様々な問題を乗り越えて、桃山祭は現在に至っている。現在も桃山祭が存続しているのは、結果として学生や来学者、大学や実行委員会にとって、毎年の桃山祭に価値が存在するからである。第50回パンフレット¹¹⁾には、桃山学院大学の学長が桃山祭に参加した全ての人に捧げる思いを次のように表現している。

一生忘れがたい、体験であったとともに、共同作業の難しさ、企画の難しさ等々、将来の社会人として求められる場面を早めに経験したことになったと思います。

つまり、現在、桃山学院大学が考える桃山祭の価値とは「社会人に必要な経験を早めに経験するためのもの」である。しかし、桃山祭に対して抱く価値は、人によって様々である。大学や実行委員会は桃山祭の運営や企画などを担うものとして、その価値を見極め、また新しい価値を見いだし、これからの桃山祭に繋げていってほしいと思う。

注

- 1) 玉置栄二「紆余曲折の「桃山祭」一五〇回を振り返って」『桃山学院年史紀要』30号(2011年3月)。
- 2) 桃山祭実行委員会『第12回桃山祭』(1972年, 桃山学院史料室所蔵, 以下同じ)。
- 3) 桃山祭実行委員会『第27回桃山祭』(1987年)。
- 4) 桃山祭実行委員会『第35回桃山祭』(1995年)。
- 5) 桃山学院大学新聞部発行『桃山学院大学新聞』(1961.11.3)。
- 6) 桃山学院大学企画課で2011年11月11日に聞き取り。
- 7) 桃山祭実行委員会『第29回桃山祭』(1989年)。
- 8) 桃山学院大学企画課で2011年7月19日に聞き取り。
- 9) 桃山学院大学広報誌『アンデレクロス』1999年11月号。
- 10) 桃山学院大学桃山祭実行委員会室で2011年7月22日に聞き取り。
- 11) 桃山祭実行委員会『第50回桃山祭』(2010年)。

参考文献

- ・桃山学院創立125周年記念誌編纂委員会『桃山学院創立125周年記念誌』(学校法人桃山学院大学, 2009年)。
- ・桃山祭実行委員会ほか『大学祭パンフレット』(1959~2010年)。
- ・桃山学院大学広報誌『アンデレクロス』。
- ・山口拓史・堀田慎二郎『名大祭一五〇年のあゆみ』(名大史ブックレット, 2011年)。